

未利用魚を活用した地域活性化促進の取組み

METAFISH PROJECT～甦れ魚たち～

高岳 公美子

1. 地域の概要

愛媛県西宇和郡伊方町は、人口7,540人（令和7年9月末現在）、四国最西端に位置し、約50キロメートルにも伸びる日本一細長い半島「佐田岬半島」にある町である。半島の先端までは、信号のない直線的なほぼ一本道が続き、年間を通じてサイクリング、ツーリング、ドライブといった観光スポットとしても人気である。

「佐田岬半島」は、北側に瀬戸内海、南側に宇和海と異なる環境の2つの海に面している。この地形を活かし、町内では古くから漁業や農業が盛んで魚介類・野菜・かんきつ類などの一



図1

次産業で生計を立てる家庭が多い。特に漁業では、2つの海域の特徴を活かし、さまざまな漁法による漁船漁業や養殖業が盛んな地域となっている。

2. 漁業の概要

私の居住地は、伊方町町見地区の瀬戸内海側に面しており、家業として小型機船底びき網漁業と海士（あまし）漁を営んでいる。底びき網漁では、愛媛県の県魚である「マダイ」をはじめ、「ハモ」や「イカ」などをメインとし、その他、季節ごとに豊富な魚種の漁獲がある。獲れた魚は、家族総出で水揚げや選別を行い、西日本でも有数規模の「八幡浜市水産物地方卸売市場」に出荷している。

3. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

私は、結婚を機に「漁師の嫁」となったが、それまでは、漁師や海とは無縁の普通の会社員として働いていたため、漁業については右も左も分からない素人であった。「漁師の嫁」になってからは、早朝型の生活や選別・出荷等の重労働など、慣れないことの連続だった。しかし、獲れたての魚を初めて食べた時の感動は、一生忘れられないものとなった。このような経験を通じて、「魚から地域を活性化したい」という思いが芽生え、そこから始まったプロジェクトが「METAFISH PROJECT～甦れ魚た

ち～」である。

プロジェクトを進めるにあたり、まず、地域漁業を盛り上げるために解決しなければならない3つの課題に着目した。

(1) 底びき網漁の弱点

底びき網漁は、多くの魚が獲れるという利点がある一方で、規格外の魚も獲れてしまうという欠点も持ち合わせている。多くの漁家では、獲れた魚を市場に卸すために選別を行うが、ここで魚たちは運命の分かれ道にぶつかる。傷がある、サイズが合わない、数が揃わないなど、味は変わらないのに利用されることのない「未利用魚」が生まれるのである。これらの「未利用魚」は自家消費されるか、近所のご家庭へお裾分けされるか、あるいは廃棄されることとなる。

「市場に卸すことのできないこれらの魚を活用できないだろうか？」この疑問が、プロジェクトを立ち上げる最初のきっかけとなった。

(2) 水産業を取り巻く様々な課題

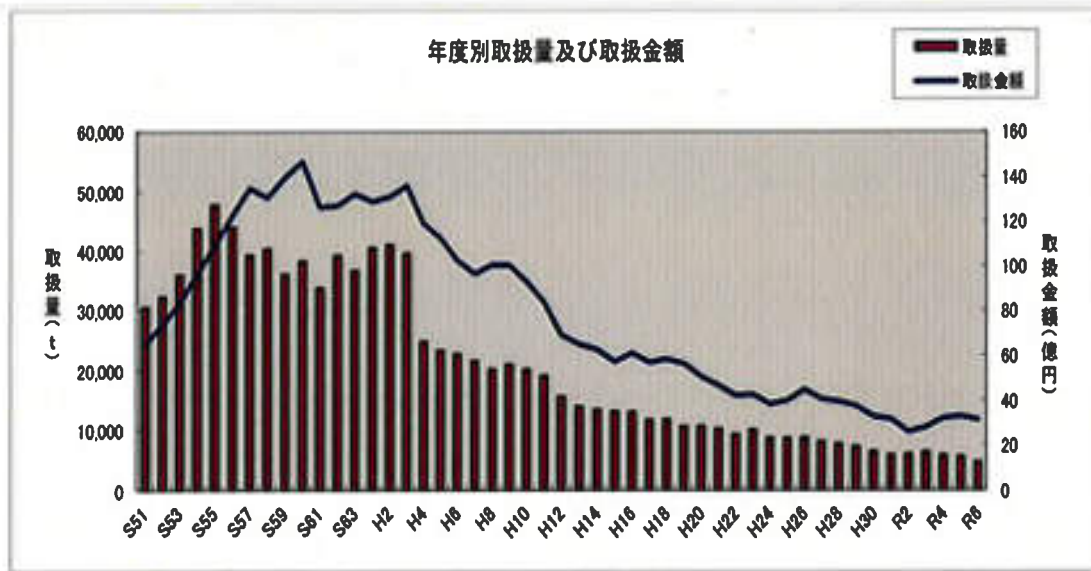


図 2

八幡浜市水産物地方卸売市場の取扱量・金額を見てみると、昭和 55 年に 4 万 7,751 トンの最高取扱量、昭和 60 年に 146 億 8,405 万 2,000 円の最高取扱金額に達したが、それ以降はほぼ下降傾向にある。水産業を取り巻く環境は、年々厳しさを増しており、これには様々な要因が起因していると考えられる。

① 環境変化

近年問題となっている「地球温暖化」や「黒潮大蛇行」等により、海水温が上昇し、磯焼けや生態系の変化が起きている。また、社会的環境要因の一つとしてコロナ禍の影響も大きかった。特にコロナ禍では飲食店での需要が減り、水揚げ量は前年と変わらないにも関わらず、水揚げ額は大幅に減少した。コロナ禍明けのここ数年、平年並みの水

準に戻ってきているものの、依然として減少傾向にある。

② 漁業者の減少

八幡浜漁業協同組合（以下、八幡浜漁協）員数の推移を見てみると、平成 17 年に 2 市 1 町の 8 漁協が新設合併して以降、その数字は減少し続けており、特に、平成 23 年以降の大幅な正組合数の減少は、八幡浜漁協の組合員資格審査基準の厳格化によるものであると聞いている。またそれに加え、高齢化に伴う廃業や後継者不足もあり、合併当初より組合員数は約 1,200 人も減少した。

八幡浜漁協は、就業フェア等に参加し、新規就業者を増やす努力をしているものの、問い合わせ件数は少なく、実際の就労には至っていないのが現状である。そのため、組合員数が増加する見込みは薄いと考えられる。

八幡浜漁業協同組合員数の推移

年		正組合員	准組合員	合計
平成	17年	1,251	1,225	2,476
	18年	1,179	1,234	2,413
	19年	1,088	1,200	2,288
	20年	1,046	1,169	2,215
	21年	1,018	1,135	2,153
	22年	819	1,258	2,077
	23年	531	1,458	1,989
	24年	493	1,487	1,980
	25年	433	1,540	1,973
	26年	416	1,543	1,959
	27年	362	1,583	1,945
令和	28年	347	1,578	1,925
	29年	341	1,545	1,886
	30年	329	1,381	1,710
	31年/令和元年	318	1,344	1,662
	令和 2年	293	1,309	1,602
	3年	288	1,239	1,527
	4年	266	1,160	1,426
	5年	260	1,088	1,348
	6年	251	1,024	1,275

図 3

③ 魚離れ

外食や中食で魚を食べることはあっても、家庭で調理して食べることは少なくなり、一般的に魚の原体を直接、目にする機会も減少している。「魚を捌けない」「魚の匂いが気になる」「生ゴミの処理に困る」などの理由で魚は敬遠されがちで、魚を食べる機会自体も減少してきている。

④ 物価の高騰

漁業にかかる燃料、漁具費に加え、機関、GPS、レーダーなどの設備費も高騰しており、漁業者は日々深刻な経済的課題に直面している。そのため、漁船漁業では、漁に出ても収支が赤字になることも少なくない。漁業収益の低下は、個々の漁業者の生計を脅かすだけでなく、地域の主要産業である漁業全体の存続にも影響を及ぼしかねない深刻な状況となっている。

(3) 地域の衰退

人口戦略会議が 2024 年に発表した分析レポートによると、八幡浜漁協が管轄する全ての市町が、消滅可能性自治体に分類されている。人口流出や地域の高齢化が進行することで、地域の衰退が加速する。特に、就業者の高齢化や後継者不足などが漁協の課題として頻繁に取り上げられており、これらの問題は、漁業だけでなく、地域社会の持続可能性に関わる重大な課題となっている。

「METAFISH PROJECT～甦れ魚たち～」は、漁で獲れる「未利用魚」を活用した加工品開発、販売を通じて、地元の魚の知名度を向上させることを目

指している。プロジェクト名の「META」は英語で「変化」を意味し、「FISH」と組み合わせることで「変化する魚」という造語となっている。さらに、「甦れ魚たち」というサブタイトルには、これまで使われていなかった魚に新たな価値を見出し、蘇らせるという意味が込められており、「魚から地域活性化を！」を合言葉に、「魚の町」としての復活を最終目標に掲げてこの活動を行っている。

このプロジェクトは、地域漁業が直面する様々な課題に対する解決策として活動をスタートし、「未利用魚の活用」は、資源の有効利用と新たな経済的機会の創出を同時に実現する可能性を秘めていると考える。

4. 研究・実践活動の状況及び成果

「METAFISH PROJECT～甦れ魚たち～」として、以下の活動に取り組んだ。

(1) 体制づくり

まず、私一人での活動からスタートとなったが、「漁業」に関する知識の乏しい私一人だけの活動には限界があると感じ、プロジェクトに賛同し、アドバイスや応援をしてくださる方々を募ることから始めた。

具体的には、八幡浜漁協の組合長や職員、地元の漁師や仲買人、自治体の関係者など多くの方々にプロジェクトの趣旨を説明し、幸いにも広く支援と協力を得ることができた。

(2) 資金調達

活動を継続するための資金確保も重要な課題である。創業資金や商品開発費用を調達するため、以下の方法を活用した。

初年度は、地元銀行の支援による「クラウドファンディング」及び「伊方町新規事業・事業継続チャレンジ支援事業等補助金」を活用し、資金とした。これらの資金を活用し、試作品の開発に注力した結果、主力商品となるブイヤベースを完成させることができた。

2年目は、愛媛県の「6次産業化チャレンジ総合支援事業」の補助金を活用し、ブイヤベースの改良や新商品の開発並びに、これらの商品の販路開拓を行った。これにより、プロジェクトは次のステージに進むことができた。



図4

(3) 商品開発

商品開発においては、「手間いらず、食べやすい」といった忙しい現代人向けの商品を目指すと同時に、「未利用魚」を効率的に使用し、製造費を抑えることが課題であった。地元では、かまぼこやじゃこ天等の練り物加工品が主流であり、競争が激しいため、

新しい食べ方の提案として「洋食」をテーマにしたレトルト食品の開発に着手した。

シーフードマイスターの資格をもった仲買人や漁協の加工部の協力を得て、第一弾商品「ブイヤベース」を完成させた。しかし、初期の商品は魚の旨味はあるものの、レトルト化の際に野菜と魚の味のバランスが不揃いになるという課題があった。

2年目には先の補助金を活用し、「ブイヤベース」の商品改良に取り組んだ。その結果、味のバランスの安定化や魚の旨味の保持に成功し、満足のいく商品が完成した。さらに、新商品として「鯛のアヒージョ」「鱧のお茶漬け」の開発・販売も開始した。



図5

(4) 販路開拓

販路開拓においては、現在、地元の道の駅や温泉施設のお土産コーナーへの商品陳列やイベント出店をメインに活動している。また、愛媛県観光物産協会が運営する通販サイト、地元テレビ局が運営する県の特産品を集めた通販サイトやふるさと納税などにも出品している。

しかし、これらの販路だけでは十分な売上に繋がっていないのが現状である。そのため、販路開拓を最優先課題として現在、活動を展開しており、地元だけでなく全国的に売り込みをかけるべく、展示会などにも積極的に出展している。

展示会では試食の評判が上々であり、さまざまな企業から商談依頼の連絡がある。現在、これらの企業との交渉を進めており、新たな販売チャネルの開拓に注力している。

今後は、展示会での好反応を活かし、全国的な販路拡大を目指すとともに、プロジェクトのさらなる成長と「未利用魚」の有効活用を図っていく方針である。



図6

5. 波及効果

この活動は、地域社会に波及効果をもたらしつつある。この活動を通じて、地元の新聞やニュースなどに取り上げられ、プロジェクトの知名度は徐々に向上している。

さらに、プロジェクトの活動は拡大しており、県の一次産業就労支援を目的とした「農林水産人」としての活動も行っている。この取り組みでは、夫婦で現場の声を届け、地元の活性化に貢献している。

加えて、親子料理教室のイベント企画運営にも携わっており、地域コミュニティとの結びつきを強化している。また、県が一次産業を盛り上げるために展開する「農林水産レポーター」に昨年度より任命され、SNS等において、一次産業の魅力や課題を広く発信する機会を得ている。

現在は、プロジェクト独自のSNSを活用し、動画配信や投稿など、積極的な情報発信に努めている。これらの取り組みが実を結び、地元の広報や全国放送のテレビ番組から動画放送の依頼を受けるなど、メディアからの注目も集めつつある。

このように、METAFISH PROJECTは単なる商品開発や販路開拓にとどまらず、地域の活性化や一次産業の振興、食育など、多岐にわたる活動を展開している。これらの精力的な取り組みを通じて、地元の盛り上がり貢献し、プロジェクトの理念である「魚から地域活性化を！」の実現に向けて着実に前進している。

6. 今後の課題や計画と問題点

私は、商品を通じて地域の魅力を発信することが地域認知度向上につながると考えている。しかしながら、現状では販売が軌道に乗ったばかりであり、売上の観点からは好調とは言い難い状況である。

今後の展開として、以下の二つの戦略を重点的に推進する方針である。第一に、販路のさらなる開拓である。より広範囲に商品を流通させることで、プロジェクトおよび地域の認知度向上を目指す。これにより、地元の魅力を広く発信し、潜在的な顧客層の開

拓に努める。

第二に、異業種とのコラボレーション企画の推進である。地元企業との連携を強化することで、地域内のビジネスコミュニティを拡大し、相互利益を生み出す機会を創出する。この取り組みは、単なる販売促進策にとどまらず、地域経済の活性化にも寄与すると期待される。

これらの取り組みを通じて、METAFISH PROJECTは、「未利用魚」の活用という当初の目的を超え、地域全体の価値向上と経済振興に貢献することを目指している。商品開発、販路拡大、地域連携という多面的なアプローチにより、プロジェクトの持続的な成長と地域活性化の実現に向けて邁進する所存である。